

「Sesame Street」と「日本昔ばなし」

松本 康子

子ども達が言葉を覚え始める幼児期に、日・英両方の言語でしっかり教育するため、アメリカの教育テレビ番組や日本のアニメーションを見せて、育てました。

＜親がテレビを見る事情＞

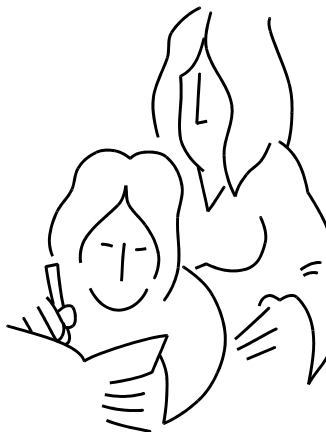
渡米直後、知り合いもいないし行くところもなく、長女と二人きりで家の中にいて一步も外に出ていけません。

少しでも言葉を理解する努力を始めれば、そのような生活も徐々に解消するとは思いますが。そんな私を心配した夫が、自分も通ったというボランティアの英会話クラスへ連れて行ってくれました。そこへ何回か通ってはみたものの、子ども連れで出席する上、私とでは周りの人との会話が進まないの、気が引けて、早々に止めてしまいました。

それなら、しばらく家でテレビを見たらと夫が勧めてくれました。私も子どもも、視聴覚からなら覚えも早いだろうと言うのです。朝5時にテレビのスイッチを入れ、寝るまでつけばなしでも、けっこう楽しく見えました。

例えば「The Price is Right」は、生活用品の値段を当てるゲーム番組で、物の名前を英語で覚えられ、平均的な物価も知ることができました。「Wheel of Fortune」という言葉当てゲームの番組では、母音や子音の抜けた箇所を埋めてスペルや文章、慣用句などを答えるものです。「Family Feud」は家族対抗合戦で、アメリカ人百人に聞いたアンケートから、回答の多かった順に1位から5位までを、家族で答えるというゲームです。この番組で、一部のアメリカの人達の考え方やその傾向が分かりました。ゲーム番組の勝者には高額なプレゼントや賞金がもらえるので、自分のことのようにどきどきしながら見たものです。

いろいろ見た番組の中でもこの3つは、繰り返し見るだけでも効果的に英語を習えらと、自分で選んだプログラムでした。大学寮へ引越してからは、人づき合いも少しは気楽にできるほど役に立ち、子どもの言葉の教育にもテレビの必要性を感じさせました。



＜子どもの英語環境と教育＞

長女が渡米して来たばかりの頃は、ビデオすらまだ十分普及していなかった時代です。子どもの視聴覚に訴える道具といえば、テレビが一般的でした。

我が家の子ども達の言葉の環境といえば、日本語は家庭で母親から、外での英語についてはサポートなしの状態でした。アメリカへ来てわずか3ヶ月の間でも、自分に合うテレビ番組を選択することや、毎日決まった時間帯に見ることで、言葉の学習の効果が上がるという自分の経験から、意図的にテレビ番組を見せました。

子ども達がテレビを一番よく見たのは3才から6・7才の時期です。娘たちが幼稚園に通っていた頃、アメリカの幼児たちが見る代表的な番組として、同じ園のお母さん達が挙げたのは「Sesame Street」「Mr. Roger's Neighborhood」でした。これらは子どもの教育番組で、プログラムの教育的なねらいがはっきりとしています。

「Sesame Street」はよちよち歩き（Toddler）から2才くらいまでの幼児を対象に、正しい食生活と習慣づけ、人を尊重したり理解すること、就学に必要な基礎英語と算数の練習、柔軟性のあるハツラツとした健康的な感情や忍耐を学ぶ、などが主なテーマになっています。

このマペット・キャラクター番組の発展版として作られたのが、「The Electric Company」です。読書が苦手という7才～10才の子ども（小学校2年生～4年生）を対象に、コメディアン寸劇、言葉の巧妙なやりとり、歌や絵を使って、発音や文法の基礎的な概念を教えるのを目的として作られた番組です。プロの喜劇役者が演じるのですから、ユーモアに溢れ、機知に富んだ会話が飛び交い、大人が見ても楽しい番組でした。対象年齢よりちょっと小さい子ども達でしたが、そのプログラムが大好きで、役者と一緒に英語の発音を口真似していました。余談ですが、その役者というのが、若い頃の喜劇役者ビル・コスビー、俳優モーガン・フリーマン、ブロードウェイ女優リタ・モレノといった、そうそうたる有名人が出演していたのには、びっくりしました。